

「鑑賞」から「歌唱表現」へ ～オペラから歌唱表現を考える～

音楽科 小川 美紀

1. 主題設定の理由

音楽科では、「知」を学力の基礎・基本と考えられる「知覚・感受したことをもとに、自ら課題を見つけ、創意工夫し、他者と関わりながら音楽で表現する力」と捉え、「自分の思いを表現しあう」ことを大切にし、歌唱表現を考える授業づくりをしている。単に歌唱するのではなく、歌詞の内容や、曲想などから、イメージを持ち、心情や情景を考え、他者とどのような表現ができるか、どのようにイメージを伝えるか、工夫し、話し合い、意見交換を繰り返すことで、新たな発見や考えが再構築され、相互理解し合うことができる。そして音楽表現の創意工夫につながって行く。

1年生より「歌唱」することを大事にしてきました。取り組みの中で常に音や音楽と関わり知覚・感受したことをもとに他者と意見交流し、言葉で伝え合い歌唱表現を考える授業をすすめてきた。本年度は3年間のまとめということもあり、ただ単に歌唱表現をするだけでなく、オペラをとりあげ、「鑑賞」から「歌唱表現」へつながる音楽学習に取り組み、今まで積み重ねてきた知覚・感受を深める学習をもとに音楽を作り上げ、互いの考えや思いを共有しながら、歌唱表現をしていく。オペラは「鑑賞」だけで終わることが多いが音楽を聴くだけでなく、音楽と物語の関わりを理解し、曲の情景から知覚・感受したことをもとに創意工夫し、他者と関わり、言葉で伝え、思いを共有することで、表現したいことが明確になり、歌唱表現がより深められるのではないかと考えた。

2. 実践の概要

オペラの学習は従来、「鑑賞」中心ではあるが、本授業では、オペラをより身近に感じ、音楽と物語の関わりや登場人物に興味を持たせ、曲の情景をイメージし歌唱表現の幅を拡げることが目的としている。また、オペラは音楽だけでなく、台本、美術、舞踊など多岐にわたる芸術に触れることのできる総合芸術であるので、生徒の興味も多様なものとなり、イメージを膨らませることができるのではないかと考えられる。導入として1学期にビゼー作曲オペラ「カルメン」の第2幕で歌われる「闘牛士の歌」に触れ、音楽の特徴と登場人物について学習しながら、歌唱した。今回は第4幕の「行進曲と合唱」の場面を取り上げ、音楽の構造と場面の状況（文化的背景）の進行からイメージをもち、創意工夫していく。生徒は民衆の立場で、登場人物の心情や情景と音楽の関わりから、知覚・感受したことをもとに、声部の役割を考えながら、イメージを持って歌唱表現する。音楽は第2幕の「闘牛士の歌」とも関連し、歌唱しやすいと考えられる。また、「鑑賞」からも音楽の背景となる文化などと関連付けて、イメージを働かせ、より一層の歌唱表現ができるのではないかと思う。

オペラの魅力を知り、イメージをもって歌唱表現をする楽しさを味わわせ、歌唱への関心を深めていきたい。

3. 音楽科の「知」をはかるには

「知」を鍛える授業展開を構想するにあたって、次の3点に留意している。

- ① 学習内容を明確にする。(知の認識)
- ② 知覚・感受を深める。(知の構造化)
- ③ 音楽で他者と関わる。(知の活用)

「知」を鍛える授業展開3つの視点において目指す生徒の姿

「知」	「知」の認識	「知」の構造化	「知」の活用
音や音楽を媒介とした表現力	学習内容を明確に理解する。	知覚・感受を深める。	音楽で他者と関わる意味を知る。
評価規準	今日の授業で何を学ぶのかが分かり、課題に対して意欲的に取り組んでいる。	知覚・感受したことをもとに言語活動を通して共有し、思考を深め表現を工夫している。	自分の考えがどうであったか互いに聴き合い、音と言葉のコミュニケーションをはかり確かめ合っている。
具体的な評価方法	行動の観察	ワークシートの記述内容 発言	演奏の聴取 ワークシートの記述内容

【実践事例】

題材 ビゼー作曲オペラ「カルメン」第4幕「行進曲と合唱」

「指導事項」をA「表現」(1)ウ 声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、表現を工夫しながら合わせて歌うこと。

〔共通事項〕 強弱 テクスチャ

単元の目標と評価規準

観点1 音楽への関心・意欲・態度	観点2 音楽表現の創意工夫	観点3 音楽表現の技能
①場面の情景と曲想との関係や声部の役割に関心をもっている。 ②場面の情景が表現できるように声部の関わらせ方を工夫し、意欲的に歌唱している。	①場面と関わる声部の役割を理解し、イメージした状況や登場人物の心情の変化を歌唱表現できるように、強弱等について知覚・感受を通して、声部の関わらせ方を工夫している。	①表現したいイメージを他者に伝えるために創意工夫したことが歌唱表現できる。

学習の流れ

- ① 「カルメン」の内容を学習する。(オペラについては2年生で学習しているので省略する)

物語から登場人物、場面を知る。

<主な登場人物>

カルメン：タバコ工場の女工

ドン・ホセ：龍騎兵伍長

エスカミーリョ：花形闘牛士

ミカエラ：ドン・ホセの許婚

<場面・全4幕>

第1幕 セビリアたばこ工場前広場

第3幕 寂しい岩山の中

生徒が思う登場人物の性格

カルメン 強気な女性。自分に正直に生きている。

ドン・ホセ 優柔不断。

エスカミーリョ 自信家。リーダー的存在。

ミカエラ 純粋で清楚。

第2幕 リリヤス・パスティアの酒場

第4幕 セビリアの闘牛場前広場

② 物語を知り歌唱に取り組んでいく。

導入として第2幕「闘牛士の歌」をアリアと合唱の部分を歌唱し、DVD鑑賞をする。

場面はリリヤス・パスティアの酒場で主人公のカルメンと花形闘牛士エスカミーリョが出会う場面である。エスカミーリョのアリアからエスカミーリョがカルメンを絶対に自分のものにするという自信や強い感情を歌声や音楽から感じ取り、また、この場面でもカルメンの存在の大きさを感じ、互いのことを意識した気持ちが大きくぶつかり合っているということを場面の雰囲気と音楽から感じ取っている。参考として「前奏曲」や「ハバネラ」も鑑賞し、曲の雰囲気をつかんでいく。

③ 第4幕「行進曲と合唱」の歌唱に取り組む。

・ソプラノ、アルト、テノール、バスのそれぞれのパートの役割（声質・役柄）を考え、その場面ではどのような表現ができるか考えていく。（※歌って確かめながら考える）

<場面と闘牛士について>

場面はセビリアの広場。闘牛試合の日。広場は大賑わい。商人たちが水やオレンジや扇などを売っている。

闘牛士の行進が始まり Chulos（チュロス）、Banderillos（バンデリーリョ）、Picadors（ピカドル）、Toreador（トリアドル）の順に登場してくる。Toreadorのエスカミーリョの登場を人々は楽しみにしている。

闘牛士について

歌詞の順に

Quadrille クアドリーリャ・・・4人組

Chulos チュロス・・・助手 Banderillos バンデリーリョ・・・銚（もり）をもつ闘牛士

Picadors ピカドル・・・馬に乗り、槍で突く闘牛士 Espada エスパダ・・・闘牛に使う剣

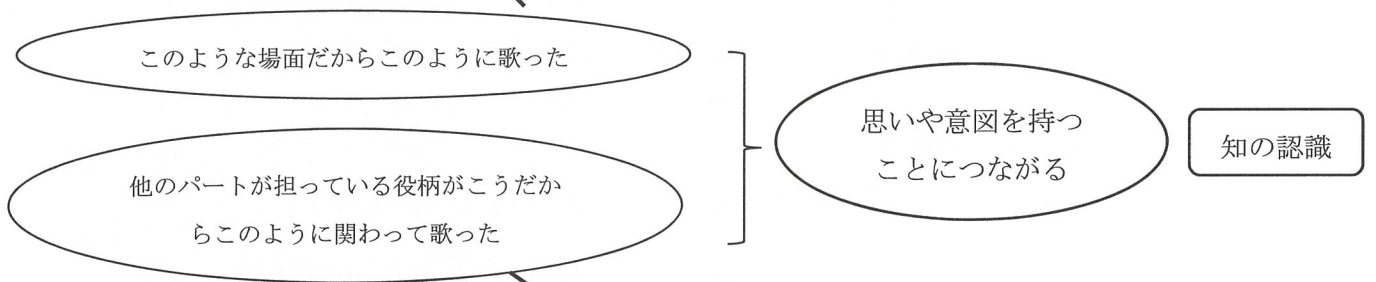
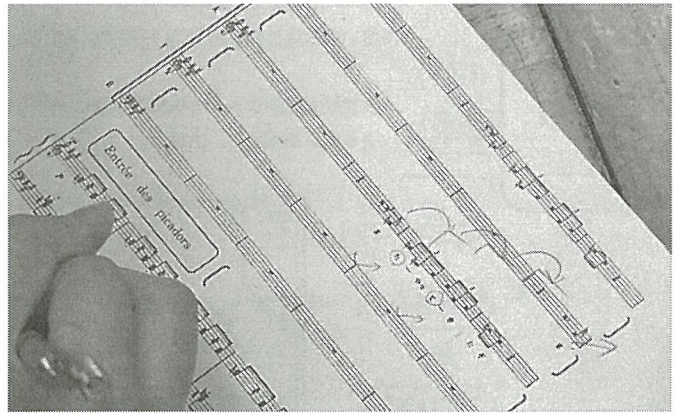
Toreador トリアドル（Matador マタドル）・・・闘牛士。闘牛競技の主役であり牛にとどめを刺す闘牛士。

エスカミーリョの職業である。

<生徒が考えた、それぞれのパートの声質からイメージした役柄>

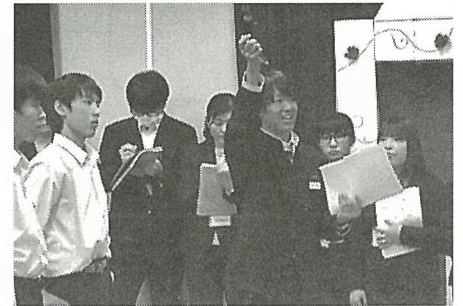
パート	ソプラノ	アルト	テノール	バス
声質	キラキラ感のある声 いちばん目立っている。	幅があり落ち着き感 のある声。	スパイシーな声 目立ったり支えたり する。（スパイスのように）	深みのある声で支え ている。
役柄	子どもから若い女性	婦人・淑女	青年 （闘牛を数回見ている）	ダンディなおじさん （闘牛を見慣れている）

闘牛を楽しみにしている民衆の立場で考え、声質から役柄を設定することで、その年代ならこんな感じではないか、とイメージしやすく人物になりきり表現を考えることができた様である。また、オペラでは物語と、音楽のもつ背景があり、両方の関わりから人々の様子、心情も読み取り、思考を深めることができた。ワークシートを使い自分が考えたこと、友達の考えたこと、意見交換したことを書き込んでいき、共有する。



それぞれの考えたことを歌唱して確かめていく。次に4パートの動き（音の重なり）にも着目し、他パートがこのように動くから自分のパートはこうだ。ということを考え歌唱表現する。

<歌唱表現の流れ>



「知」の構造化

話し合い表現を考える



歌って確かめる



「知」の活用

他パートと意見交流

単に表現を考えるだけでなく、活動の中で音楽の用語や記号などの意味を音楽と関わらせながら、そのような表現で歌うためにはどのようにすれば良いかも考えるようになる。より良い歌唱表現を目指し、音と言葉で他者と関わっていくことを繰り返していく。

生徒の気づき、考えから
 <強弱> (クレッシェンドの意味)
 pからf fからfff

弱い、強いという意味だけではなく気持ちや表情を表す。
 楽しい気持ち、ワクワク感の度合い。緊張感。
 強弱を表す時、顔の表情も関係する。

第4幕の歌唱の場面でも、情景を音楽でどのように表しているかを鑑賞で学ぶ。自分たちが演じながら歌う。「鑑賞」から「表現」へつなげていく。

生徒のワークシートより

「古い闘牛場の壁が見える。闘牛試合の日。広場は大賑わい。商人たちが水やオレンジや扇など売っている。」

活気にあふれている... お祭り!! にぎやか

♪場面の様子や人々の心情を音楽と聞わせて、イメージしよう。
♪伴奏にも着目し、楽譜の〔 〕に人々の思いやイメージしたことを書こう。

「今日はお祭だから
オレンジ2つくれ!」
「気分がいいな。扇あり!!」
「商人」
「オレンジはいかが!!」
「扇子はどうだい!!」

役柄を家族として考えている

例えろと!!

歓衆

子ども

お姉ちゃん

お母さん

(おばあちゃん)

おばあちゃん

お父さん

(おじいちゃん)

伴奏だけの箇所では場面の状況やセリフを書き込んでこんでいる。

(はずむとは違う) → 人々の興奮も上がっている感じ

かっこいい
はいまよ方
音から
はいまる

同じリズム、音を刻んでいる。
(左手の伴奏は18小節続く)

背景 うちにまた闘牛試合の日。みんな気持ちをわくわくさせ、広場は大賑わいで活気にあふれている。商人たちが、商売をあちこちでして、にぎやかなお祭ムトになっている。小さな子どもから、高齢の方まで、色んな世代の方が広場にかけつけている。それぞれの闘牛士の登場にどんどん期待がふくらみ、興奮を抑えられない様子。

ワークシートから闘牛を楽しみにしている民衆の気持ちをイメージしている。ピアノ伴奏の同じリズム、音からは、行列がせまってくる様子や民衆の気持ちのワクワク感、心臓の鼓動などを譜面や聴くことで感じ取っている。

若い女性	<p>P3~ここまでの情景(音楽の情景も含む)・人々の気持ちをまとめよう。また、パートごとにどのような役割があるか考え、歌唱表現を工夫しよう。</p> <p>ソプラノ 闘牛士が入ってきたのを一番に気付いて「来た」と言っている(子供) 楽しみにしていたことが分かる(子供)</p> <p>ソプラノから始まるので、闘牛場の雰囲気づくりの役割がある。ソプラノの歌い方次第で盛り上がり方に違いが出てくるので、基盤となる存在。</p>	主婦人	<p>心の中ではとても闘牛を楽しみにしているが、落ち着いていて、子供の騒いでいる様子を抑えている感じ。</p> <p>⇒他のパートが上がっている所はアルトが上げて、観客が盛り上がり過ぎないように調和をはかる役割。主にソプラノの支え。</p>
青年	<p>テール ソプラノのはほ1オクターブ下でソプラノと似ている。ソプラノとテールのイメージは若い女性と男性なので、ルビな感じで熱狂的に闘牛を楽しんでいる。音の高さが一定の所があり、これ以上高くなならないほどのテンションの高さを表している感じがした。</p> <p>→盛り上げる役割。</p>	年配の男性	<p>闘牛を見て叫んだりするのは、バズなく、遠くからゆっくり眺めている感じ。低くて落ち着いた太い声なので、一歩下がって見ているイメージがわいた。しかし、「巡査那魔だ」の所では、まきりと主張していることから闘牛を楽しんでいると分かる。大人な感じが全体のフォローの役割。</p>

④パートごとに発表する。考えたことが音楽表現に表れていることを共有する。

＜「ピカドル登場」の場面での生徒の活動から＞

ピカドルは馬に乗り、槍で突く闘牛士。

3番目の闘牛士の登場に人々の心情はどうなっていくのかについて、考えていく。

伴奏は馬の駆けている様子がイメージされる。

＜アルトパート＞

この場面はアルトからはじまる。「また、やって来たぞ」の歌詞から「また、闘牛士が来てくれた」と喜びの気持ち、気持ちの広がりを表現したいという意見。波がふわっとしてる感じで歌う。

アルトは役割から大人でソプラノパートは若い女性なので直線的ではないかと考えた。

＜ソプラノパート＞

次にソプラノが入る。アルトに比べると闘牛に対しては初心者。初めて闘牛を見る初々しさから軽やかに歌う。

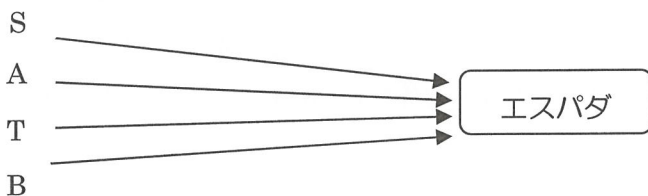
＜テノールパート＞

ピカドルは馬に乗っている。「やりつかい」はピカドルを指し、「やりかざし」はピカドルの様子を指す。

＜バスパート＞

目に見えて、馬に乗っていることがわかり、どんどんエスカミーリョにつながり、規模が大きくなっている。期待がふくらむ。

◆全パート同じ意見だったのはこの場面は次のエспаダ（エスカミーリョ）に集中する場面であるということ



<テノール>

馬は優雅さがあるので力強く、声は太く真ん中で集めるような声で歌う。

【バスからの提案】

パート内で、2つの意見が出た。

- ①「やりかざし」の所は槍のイメージはまっすぐなのでまっすぐ直線的に表現したい。
- ②ピアノ伴奏にクレッシェンドがかかっているので、同じようにクレッシェンドにしたい。二通りのパターンを歌ってみる。(比較聴取)

他パートからはクレッシェンドが音域の関係もあり聴き取りにくいという意見が出た。技術面もあるが難しい所である。結果、直線的に歌い気持ちを高めることで表現していく。アルトとは同じリズムなのでアルトも直線的に表現する。

<バス>

「そらやれはやく～」のスタッカートは気持ちの表れ。

「ひとつきに」の「に」はスタッカートだけ余韻を残すスタッカート（響きを残す）

最後の「ひとつきに」の所ではソプラノとテノールは同じ動きをするが、強弱の表現での意見が分かれた。

ソプラノ：より楽しいな気持ちを表現するためにクレッシェンドをかけたい。

テノール：pp にし、次のエスパダ（エスカミーリョの場面）で楽しみにしている気持ちを爆発させる。ピカドルで気持ちを爆発させて終わらない。またピアノ伴奏も pp となっているので合わせる。

◆各パートの提案と歌声を聴き、納得するまで意見交換していく。

結論としては絞りきれない面もあったが、各パートが自分のパートだけでなく、他パートの提案について考え、歌って何度も確かめ合い、聴き合って「思考⇒音楽表現」を共有することはとても大事である。また、自分が、パートがどのように歌ったかを知ることは技能を高めることであり、つまり何を学習したかが明確になるということである。

<生徒の感想>

【この取り組みについて】

- ・ イメージするかしらないかで、その歌の色、背景がこんなにも変わるのかと驚かされ、歌うことがますます楽しくなりました。また、自分のパートだけをまっすぐみつめるのではなく、ちがうパートの役割も考えて歌うことでよりその音楽のテーマを探ることができた。
- ・ パートごとにわかれて歌唱表現を考えたことが成功につながったと思う。各々のパートで考え方はちがったけれど、それをまぜあわせることで別の世界がつくれたりしたことが良かった。時間の関係で意見交流をさかんに行いたいと思う部分があったのが残念。
- ・ みんな自分の言いたいことを言えて、思う存分意見を反映できたので、とても充実していたし、良かった！
- ・ 取り組みの中で良かったことは、パートごとに意見交流できたこと。また、そのあと、意見を深めることができたこと。意見交流はどの教科でもよくするけど、そのあとその意見を発展させたり他の人とまぜあわせたりできたのはこの授業だけだった。
- ・ 混声四部合唱だったからパートごとの役割であったり、バランスが大切だと思った。ワークシートでは、パートごとに話し合ってから全体の歌い方を決める形式で、全員が全員で考えて納得して歌っていたと思う。
- ・ 私はアルトだったけれど、アルトは貴婦人として考えると歌い方の工夫が考えやすかった。貴婦人だと思って歌うと声がでやすくなった。
- ・ パートごとで、歌唱表現を考えることはできたが、考えた歌唱表現を実際に歌にすることは難しかった。
- ・ とにかく自分がオペラの中の状況に立っていると思い込んで歌うことに気をつけました。自分のパートだけが目立たないように要所要所で弱くしてみたり、工夫しました。表情を作ることも歌のきこえ方に影響を与えていたと思いました。
- ・ パートごとに話し合えたことがとても良かったが思う通りの歌唱をすることが完璧ではなかったのもっと歌唱練習だけというのをできたら良かったと思いました。
- ・ 一番はじめに、この歌を紹介された時は、難しい歌だというおもいがすごく強かったが、徐々に形ができてきた頃に実際のオペラ「カルメン」の4幕をきっかけで、一気にイメージがふくらみ、歌いやすくなり、またそのことが、考えを深めるスタートになった。話し合いが進み、完成に近づいた頃、大学の田中先生が来られ、先生がおっしゃった「役になりきって歌う」ということが僕が一番気をつけたことでもあり、それがさらに良いものにしてくれたと思う。最後、それぞれが明確なイメージを持ったため意見がぶつかることがあったが、それこそがより良いものをつくる時に必要だとわかった。
- ・ まず、気持ち（イメージ）を作ること。それが一番大事だと思った。それがとても歌に表れていたのもとても良かった。また、各パートの役割を考えたらうで全パートがまとまるように歌うことが大切だと思った。

【「鑑賞」から「歌唱表現」につながったと思うこと】

- ・ 歌そのものももちろんだけど、歌っている場面の様子からその場の雰囲気を感じとることができたことによって、自分の歌で何を表現したいのかということが明確になったと思うし、イメージもふくらんだ。だから実際にオペラを見たことが歌唱表現につながったと思うし、見たからこそ話し合いや、歌を完成することができたと思う。
- ・ 「前奏曲」は今回のストーリーを大きくまとめたようなイメージがあり、言葉で表現すると「カルメンの人生の縮図」といえる。そう感じたのは、音のはげしさや転調、リズム感の変化を受けたからである。私は前奏曲のインパクトをそのまま合唱にもちこむことで、よりなめらかで感情豊かなオペラになるのだと思った。
- ・ 「鑑賞」という時間があつたことで、歌っている時とはまた違う気持ちでオペラを「考える」時間にできたと思う。また、歌っている時に大切な周りとの共有に欠かせない言葉での表現の練習にもなったと思う。
- ・ 鑑賞することで「カルメン」の世界観を想像し、創造することに役だったと思います。また、鑑賞することによって、全ての人が同じイメージ、具体的なモチーフを頭に浮かべることができるので、統一した世界観につながったと思います。
- ・ 「闘牛士の歌」からその闘牛士がどれだけ尊敬されているかが分かり、それを民衆の感情につなげられた。
- ・ エスカミーリョやカルメンがどういう人なのかということや舞台がどんなところであったのかということが知れてイメージがふくらんだ。
- ・ その場面での感情の動きや、舞台の雰囲気をつかみやすくなったと思います。闘牛という現在の私たちの生活にはないものの表現をする、考えるということに対してのより良い学習になったと思います。
- ・ 「前奏曲」ではオーケストラによる音楽だったので、使われた楽器のもつイメージと音のイメージが歌唱表現につながったと思う。
- ・ ストーリーの前後が分かったことでイメージはもちろん、感情の変化、音と音の変化にも気がつくことができた。アリアになるとその人の感情は声となって表れるので強弱の変化や、のびし方、声のふくらませ方（音）を学ぶことができた。気持ちの流れやリズムの流れをつかむことができ、人の動きや心の変化から表現につなげることができた。

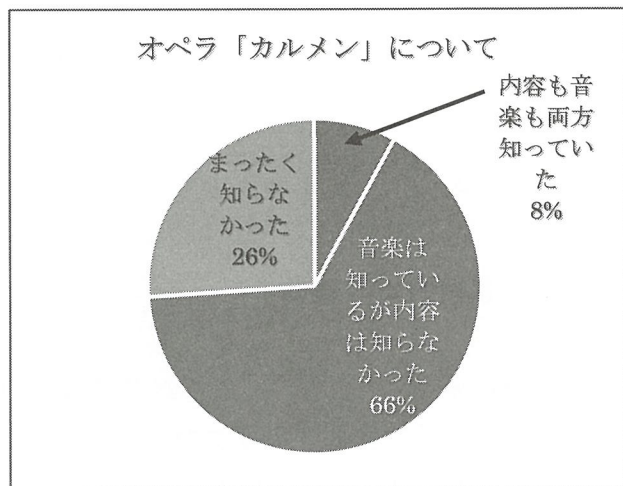
<オペラについて>

オペラのイメージを生徒に聞くと、大人が楽しむもの、上品、堅苦しい、ストーリーがわかりにくい外国のもの、貴族たちの娯楽、高い（チケット代）など、中学生にとっては身近でないものにとらえている。鑑賞の経験も中学校の授業で観たというのが圧倒的で、全体の約10%の生徒が小学校の時に観ている。（学校、DVDなど）その中には外国のホールで観たことがあるという生徒もいた。鑑賞する前とした後では感じたことが変化する生徒も多く、最初に持ったイメージとは違い内容が理解できるととても見やすくなり、物語の内容だけでなく、舞台、衣装、音楽だけでも楽しめるものというイメージが変わっていった。実際にオペラを歌ったことについては、「普段やっている曲より難しかったが、歌えるようになると達成感が感じられた。」「合唱の響き方が今までより何かが変わったのがおもしろく感じ、混声四部になったことで自分が歌う役割や必要性をより感じる事ができた。」と約80%の生徒が興味をもつことができた。（あとの20%のうち19%はまあまあ興味を持てたという回答であった。）

オペラ「カルメン」は物語の内容はよく知らないという生徒は多いが、音楽はテレビ、CM、BGMでもよく流れていて、自然と耳にしているからか、74%の生徒は知っていた。物語をくわしく知ること、より興味を持つことができたのかもしれない。

<成果と課題>

この3年間、「歌唱」することを大事にし、また表現についてもどのようにすればよりよい表現ができ、歌唱につながるのかということの研究してきた。1年次は日本の伝統音楽である「民謡」から文化的背景をもとに表現を考え、2年次では「創作」分野に取り組み、創意工夫して音を音楽へと構成し、表現していく学習をした。音楽科では次の3点に留意し、授業を進めてきている。①学習内容を明確にする。(知の認識) ②知覚・感受を深める。(知の構造化) ③音楽で他者と関わる。(知の活用) 特に、②の知覚・感受を深める。という場面においては、音とかかわりながら、思考し、生徒同士が納得するまで話し合い、授業者からも何度も発問を繰り返すことで、さらに、生徒は思考し、イメージを膨らませていくということを常にしてきた。その学習の土台があり、今回のオペラで歌唱表現を考えるという大きな取り組みができたのではないと思う。また、ただ歌唱するだけではなく「鑑賞」を取り入れることにより、考える材料、ヒントがたくさん詰まっており、文化的背景、音楽の持つ背景、人物像など理解が深められた。パートごとで話し合い音と言葉のコミュニケーションを行き来しながら、役割を考え、その役になりきって歌唱することや他パートとの意見交流の中で、意見の違いからぶつかることもおもしろく、生徒同士で思考・判断する場面であったと思う。生徒の発想は豊かでいろいろな表現に出会えたことはとても良かったことである。課題としては生徒の感想にもあるように、時間と技術面である。時間については、題材が大きく、いろいろな思いが出て、話し合う活動はとても充実しているが、よりよい表現を考えると時間がなくなってしまい「もっと深めたかった。」という意見があり、授業者としても苦しいところである。技術面に関しては、考えた表現をどのように歌いどう響かせるのか。思いはあるが、なかなか声にならないというところである。確かにオペラは難しくかなりの技術がいる。中学生で安定した音程、発声には限界があるであろう。しかし、「鑑賞」から本物を観たからこそ、生徒は近づきたい、この表現をするには、こんな声が必要なんだと工夫の場面でも声の出し方にこだわっていたパートもあった。これは、オペラというものをきちっと味わい価値を見つけることができたということが言えるのではないか。



<3年間の学びから>

中学校の3年間というものがとても大事だと実感した。いろいろな成長が見られた3年間であった。1年次より2年次、そして3年次、と知識、理解、そして語彙も広がり、音楽でいうと創意工夫し、表現する力は身についたのではないと思う。やはり3年間の積み重ねというものは大きく、「知」をはかるとは、そういう積み重ねを指すのではないと思う。これからも3年間というものを大事にし、新たな目標を作り生徒の力を引き出せるように歌唱表現の研究開発をしていきたい。

